

## 総合科学研究所だより

Research Institute of Integrated Sciences and Humanities

## 巻頭言

総合科学研究所長 渋谷 寿  
SHIBUYA Hisashi

令和元年6月20日の朝日新聞に「統計的に有意は誤解の温床」という記事が掲載されました。「統計的に有意」とは調査結果の分析において偶然とは思えない指標として用いられますが、薬の副作用・効用に関する判断基準として、その解釈が間違っていた結果、副作用がないとは言えない薬や効果が証明されていない薬が流通したことがあるという事例が解説されています。その上で、多くの研究者が「やめるべき考え方」として賛同しているという内容の記事です。「統計的に有意」の考え方は科学的知見に関する意思決定をする上で重要なことは変わらないと思いますが、大阪市立大学の新谷教授は、「統計的に有意かどうかで白黒をつけることは便利だが、他の情報にも目を配り総合的に判断すべき」と結ばれています。

本だよりでは、総合科学研究所がサポートしている、「創立者越原春子および女子教育に関する研究」、「大学における効果的な授業

法の研究」、「食と健康に関する研究」、「幼児教育で育みたい資質・能力に関する研究」などの機関研究および学際的な、異なる分野の研究者が協同で行うプロジェクト研究などを紹介しています。これらの研究の中でもこの統計的手法が用いられることも多く、変化が激しい昨今の社会において、既存の考え方が必ずしも全てではないという視点も組み入れて研究を進めることの重要性を示唆しているとも言えるのではないのでしょうか。

本年度から、本学でも学生の成績評価の方法として、ルーブリック評価が導入されました。これも大学教育上の大きな変化の一つとして捉え、令和2年の冬に開催予定の総合科学研究所主催大学講演会では立命館大学の沖裕貴教授を講師にルーブリック評価についてご講演をお願いしています。本だよりでも紹介記事を掲載しますので、ぜひ講演会にご参加いただき具体的方法論などを学ぶ機会にさせていただきたく思っています。

また、本だよりでは、年々充実した内容になってまいりました、瑞穂児童館、瑞穂保健センター、瑞穂区役所などと連携した地域貢献事業も紹介しています。変化の激しい時代を正しい判断で乗り切るには「総合的な判断」が今後重要なキーワードとなると言えるのではないのでしょうか。

平成30年度  
「開かれた地域貢献事業」  
報告

## 名古屋市瑞穂児童館 平成30年度の共催事業を終えて

瑞穂児童館と名古屋女子大学が共催事業を行うようになって11年がたちました。

平成30年度は、0歳～高校生世代までの幅広い年齢の子どもたちや保護者を対象とした12の講座とクリスマスイベントを開催し、たくさんの方々に参加していただきました。

共催事業を開催するにあたっての打ち合わせでは、企画に携わる先生方が毎年一同に集まり、意見を出し合うことに驚きました。そうして考えられた企画は、子どもたちがのびのびと遊べ、想像力や表現力を豊かにし、参加した保護者や子どもたちが、笑顔になれる企画となりました。

「子育て支援」企画では、音あそびや絵本、劇など乳幼児の興味をひくものがたくさんあり、参加した保護者からは「学生さんと関わることが、子どもも嬉しそうでしたし、自分も楽しい時間を過ごせた」というお話がありました。私は、この共催企画を通して交流を深めることで、リフレッシュの場となり、大学の強みである専門

名古屋市瑞穂児童館 レクリエーションスタッフ 北園緩子的な知識を取り入れていくことで、子育てを楽しむエッセンスになるといいなと思いました。

「児童健全育成」企画では、工作や料理、実験やプログラミングなどがあり、子どもたちのやる気を引き出すものがたくさんありました。子どもだけではなくなかなか使えないものも、学生が一人ひとり丁寧に教えてくれるので、子どもたちはドキドキしながらも挑戦することができ、達成感を味わえたようでした。

大学との共催ということで、新しい情報や、学生の斬新なアイデア、あふれるパワーを感じる企画が多く、児童館だけではできない内容も、こうした場の提供を通して実現することができ、大学施設を利用したことも魅力の一つでした。

これからも、専門的な知識や学生たちの力を、子どもたちの喜びや成長へとつなげていけるよう、名古屋女子大学と児童館、それぞれの強みを活かしながら、地域のみなさんにとって素敵な時間や体験の場となるような企画を今後も開催できることを願っております。



歌で遊びましょう



プログラミングでアニメーションを作ろう



糸電話でおもしろ実験



クリスマスのペーパークラフトを作ろう

平成30年度  
「開かれた地域貢献事業」  
報告

## 名古屋市保健所瑞穂保健センター「若返りきらきらセミナー」を終えて

保健予防課 感染症対策等担当 岡部敬子

瑞穂保健センターでは、平成21年度より名古屋女子大学と共催で高齢者の介護予防を目的とした「若返りきらきらセミナー」を開催しております。このセミナーは、名古屋女子大学の先生が講師として実施され、市民から大変好評をいただいております。

平成30年度につきましても、10月から2月までの間に5日間コースで開催し、60歳代から80歳代の30名が参加されました。

1日目のアイロンプリントを使ったオリジナルTシャツ作成では、世界で一枚の自分だけのTシャツを作ることができました。2日目の懐かしい唱歌・童謡の歌唱では、懐かしい思い出を感じながら大きな声で歌われていました。歌うことは心身のリフレッシュや嚥下障害の予防にもつながり、健康維持に大きな役割を果たします。3日目の健康に過ごすためのストレッチ&エクササイズでは、舞踊家でもある豊永先生の美しい動きに見とれるとともに、バランスボールを使った体操では、本当に楽しいご様子でし

た。4日目のオリジナルシリアルバー作りでは、マッシュマロを熱し、あっという間に出来上がるのに驚くとともに、大変美味しくいただきました。5日目の口腔についてのお話と調理実習では、日頃高齢者が食べないようなトロピカルなお料理に舌鼓をうたれていました。

講話だけでなく、作品制作や音楽療法、調理実習などアクティビティを取り入れた多彩なものとなっており、いろいろなテーマに触れて、感じて、楽しく気持ちが若返るものばかりで、参加者の皆さんは期間限定のキャンパスライフを満喫されていました。

いくつになっても、興味を持って一歩表に出ることや、人と接し笑うことが大切です。今後も名古屋女子大学と瑞穂保健センターの協働により、地域の皆さんの健康づくりに寄与していきたいと思っております。



オリジナルTシャツ作り



懐かしい唱歌、童謡を歌いましょう



ストレッチ&エクササイズ



高齢期の食事を見直そう

平成30年度  
「開かれた地域貢献事業」  
報告

## 名古屋市瑞穂区役所「育休復帰応援講座 時短レシピでクッキング!」を終えて

民生子ども課民生子ども係長 村井史朗

瑞穂区役所民生子ども課と名古屋女子大学との初のコラボ企画であるみだしのイベントを、平成30年8月22日(水)に開催いたしました。育休中の方を対象に、名古屋女子大学側で今流行りの「時短料理」についての料理教室を、瑞穂区役所側で保育所等の入所手続きに関するプレゼンテーションを行いました。併せて、より気軽に参加いただけるよう、子育て支援ネットワーク「さくらっこ」と名古屋女子大学の学生とによる託児も実施いたしました。

参加者の方からは「食事作りと子育てとの重要性について理解できた。」「時間の使い方の参考になった。」など概ね好評で、次回の開催を望む声もいただきました。また、「男性の参加者が少なかった。」との声を受け、今年度(令和元年度)は、土曜日での開催とさせていただきます。

以上のように、瑞穂区役所と名古屋女子大学とで、今後も改善を重ねて瑞穂区民の方にとってよりよい企画が開催できるよう一層の連携を深めていけたらと考えております。



調理の様子

## 機関研究

### 「幼児教育で育みたい資質・能力に関する研究」 人とかがわる楽しさを味わうことができる支援の在り方—自由遊びを通して—

幼児保育研究グループ

今年度は、研究主題を「人とかがわる楽しさを味わうことができる支援の在り方—自由遊びを通して—」と設定し、各クラスの現状把握の中から課題を打ち出し、子供の観察から取り組み始めています。

子供が成長していくためには、周りの人との関わりの影響が大きく作用します。幼稚園教育要領の領域「人間関係」の【内容の取扱(3)】にもあるように、「幼児が互いに関わりを深め協同して遊ぶ」ことは、「活動を展開する楽しさや共通の目的が実現する喜び」を生み、さらに活動を工夫したり協力したりする子供へと成長してい

くと思われま。このように、子供が友達と一緒に楽しく遊んだり活動したりして人間関係を広げ深めていくことは、互いの役割分担や人とのつながりの大切さに気付き、社会生活を営んでいく基礎を学習することになると考えられます。そこで、それぞれの年齢の子供が、教師や友達との自由な遊びの中で、『楽しいなあ』という気持ちになるための環境の構成や教師の支援について追求していきたいと考えています。

(文責：森岡とき子)

## 機関研究

## 「大学における効果的な授業法の研究 8」

～本学における効果的なアクティブラーニングの開発～

三宅元子(代)・市村由貴・河合玲子・佐々木基裕・渋谷 寿・白井靖敏・杉原央樹・竹内正裕・遠山佳治・羽澄直子・服部幹雄・野内友規・山田勝洋・吉川直志

平成30年度～令和2年度の本機関研究では、大学教育に求められている「学生が主体的に問題を発見し解を見いだしていくアクティブラーニング(以下、ALと記す)」について研究しています。

初年度は、本学の学部・学科の特性に応じたALの手法を見いだすために、各教員が担当している科目で実践しているAL型授業の事例について発表し、全体討論を行いました。2年目の今年度も、引き続き授業実践の発表と検討を行います。その後、「ALを通し

て学部・学科の特性に応じてどのような資質・能力を育てるか」についてを明確にした目標と評価について研究していきます。一般的に「ALの評価は難しい」といわれていることから、ALの評価について理解を深めるために2冊のテキストを輪読し、意見交換を行う計画を立てています。また、学会や研修会にも積極的に参加し、情報を収集していく予定です。

(文責：三宅元子)

## 機関研究

## 「創立者越原春子および女子教育に関する研究」

佐々木基裕(代)・河合玲子・遠山佳治・豊永洵子・三宅元子・吉川直志・吉田 文

本研究は令和元年度～3年度の3年間にわたって行われるものです。本年度は、その初年度に当たります。前期研究を引き継ぎながら、越原春子先生の建学の精神、教育理念を戦後昭和期の日本の女子教育史の中に位置付けていく共同研究と、それを視野に入れた各メンバーの専門分野に基づいた個人研究を同時並行に進めています。

共同研究においては、学校情報の整理を目的とした関連教職員へのインタビューを計画しております。これまでも、本学に長く勤め

られた先生方への聞き取り調査を行ってきました。本年度も、更に詳細な女子教育の歴史叙述を目指します。

個人研究に関しては、研究メンバーが自らの専門性に基づいた研究を進めております。短期大学、大学開設へと至る戦後昭和期の本学の状況を念頭に置きながら、教育学、歴史学、音楽学、体育学、社会学等のメンバーが有する専門性を活かし、学際的な観点から研究を進展させていく予定です。

(文責：佐々木基裕)

## 機関研究

## 「食と健康に関する研究」

駒田格知(代)・伊藤美穂子・大曾基宣・小椋郁夫・近藤浩代・澤田樹美・高橋哲也

昨年度は、本研究会において、「かむ」ってなあ～んだ?という冊子をメンバー全員の協力のもと完成し、出版物の形となりました。本年度は、これらをさらに増刷して、名古屋市・愛知県・岐阜県・三重県の全小学校に配布する計画です。そして、教育現場での効果および評価を得て、冊子の内容をさらなる発展に向けての調査・研究を進めます。一方では、近隣地域において「咀嚼く」から始まる健康増進への具体的な方向を追究していきます。さらに、

長期展望的には、咀嚼くに続く消化・吸収に関連した方向での“食と健康”の分かりやすい冊子の作成に向けて、幅広く研究・考察を推進していきたいと願っています。本大学の基本の一つとして位置づけられた「食と健康」の研究が、さらに発展していくようにメンバー全員で構築していきたいと思っています。

(文責：駒田格知)

## プロジェクト研究

## 「幼児の音楽感受と身体表現」

坪井眞里子(代)・眞崎雅子・伊藤充子

本研究は幼児の音楽感受能力と身体表現活動の相互性に着目し、音楽の聴きとり、感受・知覚能力と身体表現力の結びつきを、実践を通して明らかにすることを目的としています。今年度、幼稚園での実践を8回計画しています。就学前の5歳児を対象に5月・6月と4回の実践を行いました。小学校での鑑賞曲を取り上げ、音楽を構成する要素として拍・リズム・強弱・音色・フレーズについて子ども達の自発的な表現を促しました。そのプロセスを記録する

とともに、客観的な視点から判断・評価を行う為、保育者・学生を含め5名で評価を行っています。今後、子ども達の音楽の聴き方・表現力がどのように変化していくのか子どもの主体的な動きに重点を置き、評価シート・運動量記録・動画記録をもとに分析を進めていきます。

(文責：坪井眞里子)

## プロジェクト研究

「近代日本における音楽教育の変遷をふまえた  
今の日本に必要な音楽・音感教育のあり方Ⅱ」

稲木真司(代)・佐々木基裕

昨年度は、近代日本における音楽教育の変遷をふまえて、日本の音感教育および音楽教育について調べてきましたが、今年度は継続して、グローバルな視点から日本の音楽教育を捉える研究を行う予定です。

日本の音楽教育においては、日本音楽教育学会などの場でも、これまでに何度も、ドレミを絶対音高として用いる「固定ド教育」と、ドレミを階名として用い、主音を常にドとする「移動ド教育」

についての論争が起きました。これに関する最終的な解決はいまだされていない状態なのですが、近年の研究により、日本の音楽教育において、相対音感の教育が欠けていることが明らかになってきています。幼少期に特別な訓練をしなければ身につかない絶対音感に対して、年齢に関わらず訓練すればだれでも身につけることのできる相対音感の訓練を、どのように日本の音楽教育に取り入れることができるのか引き続き研究していきます。(文責：稲木真司)

## 開かれた地域貢献事業 令和元年度事業計画紹介

本研究所では瑞穂児童館および瑞穂保健センターとの交流事業を毎年企画・運営しています。これらの事業での講座やイベントは、地域の皆様に毎年楽しみにして頂き、多くの方にご参加いただいております。瑞穂児童館との交流事業では、乳児から幼児、小中高生までを対象に7月から3月までの10講座と、12月のクリスマスイベント6講座を計画しています。瑞穂保健センターとの交流事業では、昨年度に引き続き、65歳以上の方を対象とした「若返りきらきらセミナー」を、9月から6回の予定で開催します。テーマとして、運動、認知予防、口腔、栄養の4つを掲げ、料理教室か

ら、歌唱や遊び文字など多彩な内容をそろえています。また8月には、平成30年度よりはじまった瑞穂区役所との共催事業である、育休中の方の支援を目的とした、育休復帰応援講座も計画しています。これらの事業は、健康科学部、文学部、短期大学部の教員や学生の有志によって行われ、特色ある大学での教育研究活動を基にした楽しい講座となっています。本年度もこれらの地域貢献事業の講座にご期待ください。

(文責：堀江信之)

## 大学講演会のお知らせ

## 演題

## 大学におけるルーブリックを用いたパフォーマンス評価

講師 沖 裕貴氏 ●立命館大学教育開発推進機構教授

日時 令和2年2月21日(金) 10:00~12:00

場所 学校法人越原学園 記念館ホール

本年度は、本学でも全体的に取り入れられた学生評価（ルーブリック評価）をテーマとしました。そこで、「大学におけるルーブリックを用いたパフォーマンス評価」と題し、立命館大学教育開発推進機構の沖裕貴先生にお話を伺います。

パフォーマンス評価とは、評価指標と評価指標に即した評価基準のマトリクスで示される配点表（＝ルーブリック）を用いた成績評価方法のことです。達成水準が明確になることにより、テスト法では困難な「思考・判断・表現」や「関心・意欲・態度」、「技能」の評価に向くとされ、大学ではレポートの評価、学生の活動や作品・演出・実験の観察評価、面接の評価、プレゼンテーションやグループ活動の自己評価・相互評価の評価などに有効とされています。今回は、パフォーマンス評価が求められるようになってきた背景や、その活用法、活用の留意点などを豊富な事例に基づいてご講演いただきます。



## 略歴

沖 裕貴(おき ひろたか)

名古屋大学理学部数学科卒業。京都教育大学大学院教育学研究科修了。京都経済短期大学経営情報学科助手、専任講師、助教授を経て、2002年4月、山口大学大学教育センターに助教授として赴任。2003年4月より教授。2006年4月、立命館大学に異動し、現在、教育開発推進機構、教育・学修支援センター教授。

## 今年度(令和元年度)運営委員

## 委員長

森屋 裕治  
MORIYA Yuji  
(短期大学部)河合 玲子  
KAWAI Reiko  
(短期大学部)羽澄 直子  
HAZUMI Naoko  
(文学部)三宅 元子  
MIYAKE Motoko  
(健康科学部)山田 久美子  
YAMADA Kumiko  
(健康科学部)

## 研究所メンバー

## 所長

渋谷 寿  
SHIBUYA Hisashi

## 顧問

河村 瑞江  
KAWAMURA Mizue

## 主任

堀江 信之  
HORIE Nobuyuki

## 教授

越原 一郎  
KOSHIIHARA Ichiro

## 職員

寺島 まり子  
TERASHIMA Mariko

## 職員

牧野 弘実  
MAKINO Hiromi

## 編集後記

ここに総合科学研究所だより29号をお届けいたします。少子化の時代を迎え、大学の使命として、教育・研究に加え、地域貢献が三本目の柱として重視されています。本研究所でも学内での教育、研究活動を推進する一方で、その成果を地域に還元するための、地域貢献事業を多くの先生にご参加いただき継続的に行っています。地域での教育、文化、知の拠点としての大学を目指して、研究所の事業への期待もますます大きくなっています。これらの活動を通じて、地域の方々の大学への関心、理解が進むことを祈念しております。ご執筆いただきました関係者の皆様に感謝いたします。今後とも、総合科学研究所の活動にご期待いただき、ご協力をお願いします。

(文責：堀江信之)